

## 看護学生が捉えた「へき地」に暮らす人々の 生活・価値観についての質的研究－第2報－

平山恵美子・岩月すみ江・登内 芳子

Qualitative Research on the Way of life and Sense of Values of  
the People living in Remote Place from the Viewpoint of the  
Nursing Students (2nd Report)

Emiko HIRAYAMA, Sumie IWATSUKI and Yoshiko TONOUCHI

**Summary :** To deepen the understanding of the uniqueness of community health and its subjects in adult nursing, we introduced "Clinical practicum of traveling clinic in remote place." As shown in the first report in 2005, some nursing students acquired a deeper understanding of the people who live in remote place, while some only acquired a superficial and general understanding. In 2005, to facilitate a deeper understanding of remote place patients, we introduced group work whereby groups of students rotated through the same patient. Results from a qualitative analysis of the students' clinical evaluation revealed twelve categories describing rural subjects' way of life and sense of values. 1. Affluence. 2. Mundane. 3. Inconveniences. 4. Creativeness. 5. Maintenance. 6. Helplessness and loneliness. 7. Neighborhood solidarity. 8. Social role. 9. Social support. 10. Independence. 11. Understanding and appreciation of life. 12. Family support. We compared the categories with those of the previous year. Results revealed that the students improved their understanding of rural life as shown by their increased number of specific comments, and their positive perceptions. However, the students still failed to understand the point of view of subjects who had a life filled with some sort of health problem, and the teachers still need to facilitate a more holistic understanding of the subject in the students.

**Key words :** へき地 (remote place), 価値観 (sense of values), 生活 (life), 看護学生 (nursing student), へき地巡回診療実習 (clinical practicum of traveling clinic in remote place)

### 研究背景及び目的

I 短期大学看護学科成人看護学においては、地域医療<sup>注1)</sup>の特徴と対象の理解を深めるため、平成14年度から「へき地巡回診療実習」を取り入れている。第一報<sup>1)</sup>で報告したように平成16年度は、単にへき地に暮らす人々の生活の様子を知るにとどまらず「①地理的制

約のある所で生活をしている人々の生活背景・生活像・価値観に焦点を当て人々の生活を知ること、②実習をとおり様々な生活があることの理解に繋げる」を学習目標に掲げ実習を展開した。その結果、様々な生活があることの理解は深まったが、実習が一回の限定であるため、へき地に暮らす人々への親身な関心にまで至らず、見たり聞いたりなどの受動的

な捉えに終始し、表面的理解に終わったものもあった。学生が実習を展開している地域の特性などについては、第一報に詳述している。

平成17年度はより深い対象理解に繋げるため、①生活の営みやその意味に視点を置いた教員の意図的な関わり、②患者個別記録の充実、③実習後に同一患者を受け持った学生同士のグループワークを試みた<sup>2,3)</sup>(詳細は表1を参照)。本研究の目的は、学生がへき地に暮らす人々の生活や価値観をどのように捉えたのかを明らかにすることであると同時に、平成17年度では教育手法をより深い対象理解が出来るように変更したため、その教育効果についても明らかにすることである。

## 研究方法

### 1) 研究対象・調査時期

I 短期大学看護学科3年生59名のうち、本研究への参加の承諾が得られた52名に対し、平成17年度成人看護学実習が終了した11月28日に調査を実施した。

### 2) データ収集の方法

研究者らが平成16年度に作成し前回の研究

報告でも使用した「へき地巡回診療実習」に関する質問紙を使用し、集合調査による記述的調査法を用い、参加者に自由記載を求めた<sup>4)</sup>。

〔質問内容〕

- ①「へき地巡回診療」に関すること
- ②「へき地に暮らす人」に関すること
- ③「へき地に暮らす人々の生活」に関すること

### 3) 分析方法

質的研究手法を用いて分析を行なった<sup>5-8)</sup>。具体的には研究者ら3名で、質問紙より、へき地に暮らす人々の生活・価値観に関連した項目である「へき地に暮らす人」「へき地に暮らす人々の生活」を取り上げ、研究テーマである“生活”“価値観”と関連の深い文脈を抽出しデータ化した。次にデータを解釈し、他のデータとの関連性を見ながらコード化を行った。さらに、生成された複数のコード間の関連性を吟味しつつ、生データに立ち返りながら包括的にまとめ、カテゴリーを生成した。生成されたカテゴリーとコードの関係性を再度吟味しながらカテゴリーの名称や定義の修正変更を行った。これらの分析プロセスの中で現象の抽象化を進め、研究テーマである学

表1 へき地巡回診療実習の展開方法

平成16年度展開方法		平成17年度実習展開の変更点
実習当日	午前	<p>意図的関わりとは</p> <p>対象を点ではなく、継続的に捉えるということに加えて、一人の生活者として、生活の営みやその意味が捉えられるように関わった。※例えば、学生がへき地で見聞したことに対する教員の発問を、「どのような在り様なのか」から始め、「どのような意味があるのか、なぜなのだろうか」というように、学生の捉えが深まるように関わった。</p>
	午後	
実習終了後	十二月下旬	<p>グループワーク</p> <p>実習終了後は同一患者を受け持った者同士によるグループを作り、教員がファシリテーターとして参加し、グループワーク→発表→グループの振り返り→個別の振り返りを行った。</p>

生が「へき地に暮らす人々の生活・価値観」をどのように捉えたのか、その実態を帰納的に明らかにしていった。最終的に、記述(数及び内容)、コード、カテゴリーの一連の流れから、対象の捉え方や理解の深まりについて平成16年度と比較し、その結果から教育手法の評価を行った。

#### 4) 分析結果の信頼性の確保

アクセス可能な対象者2名に分析結果を提示し、検証したところ異議はなく同意が得られた。

#### 5) 倫理的配慮

対象となる学生全員に対し、学生らが一堂に集合した場所で研究者らが作成した「研究参加ご協力お願い」を用いて、研究の趣旨と以下の倫理的配慮について説明し、書面で同意を得た。

- ①自発的な同意を保証する。
- ②回答内容のいかんによって、実習評価に対するどのようなメリットもデメリットもない。
- ③研究データは厳重に保管し、研究者のみが閲覧するとともに研究終了後は責任を持って破棄する。
- ④研究として発表する時は、個人が特定されないように配慮する。
- ⑤得られたデータは、成人看護学実習の内容・方法の評価及び検討のみに使用し、その他の目的には流用しない。

## 結 果

本研究のテーマに関連した学生の総記述数は267記述であった。分析の結果、学生が捉えたへき地に暮らす人々の生活・価値観に関するカテゴリーは①豊かな生活、②あたりまえの生活、③不便な生活、④工夫した生活、⑤生活を維持、⑥心細く寂しい生活、⑦住民同士の強い絆、⑧役割がある、⑨社会的支援、

⑩充実感のある自立した生活、⑪気づかいと感謝、⑫家族が支えの12分類であった。表2に分析で得られたカテゴリーとコード及び記述数の一覧を示す。カテゴリーの意味分析の便宜上、1)生活状況に関すること、2)社会に関すること、3)価値観に関することの3グループに大別した。抽出されたカテゴリー別に学生の記述を引用し、説明を加える。文中の《》はカテゴリー、『』はコード、「」は質問紙に記述された言葉である。

### 1. 平成17年度のカテゴリー結果

#### 1) 生活状況に関すること

このグループでは、へき地に暮らす人々の生活の営みや生活を取り巻く状況について記述されていた。

#### カテゴリー1《豊かな生活》

町全体が家族のように、あたたかい関係を築いており、人々は生き生きと生活し、自分のペースでゆったりと生活している。

『地域・住民どうしの親密な交流』では、学生はへき地に暮らす人々が地域・近所と交流が深く、町全体が家族のようにあたたかい関係を築いていると捉えていた。例えば、「毎日電話で会話したりお茶のみしたりしている」や「町全体が家族のようにあたたかい関係を築いている」と記述されていた。

『生き生きとした生活』では、へき地に暮らす人々が生き生きと生活していると肯定的に捉えていた。例えば、「生き生きと表情豊かに存在していると感じた」「寒い冬以外は田畑の仕事などに大忙しで、活発な生活をしていると考えた」と記述されていた。

『ゆとりのある生活では』、人々がへき地での暮らしはゆっくりと時間が流れており時間に追われることなく自分たちのペースでゆったりと生活していると捉えていた。例えば、「自然の中でゆったりとした時間のなかで生活しているんだと感じました」や「自分たちのペー

スで時間に追われることなく生活している」と記述されていた。

## カテゴリ 2《あたりまえの生活》

『不便に感じていない生活』では、学生は実際にへき地に赴き、不便だと感じたこともへき地に暮らす人々は不便には感じず生活し

ていると捉えていた。例えば「淡々と生活されていて、私が考える不便さ・苦勞（まきを割って火をおこす、買い物は巡回を利用する、人と会うにも急坂・狭い道・交通が不便etc）を感じていない」や「私たちは自分の住む町がこうだったらいいなと思いつつも、たいした不便は感じずに過ごしているが、へき地の人たちもそうなの

表 2 カテゴリとコード及び記述数の一覧

平成16年度 カテゴリ及びコード一覧				平成17年度 カテゴリ及びコード一覧			
グループ	カテゴリ	コード	記述数	グループ	カテゴリ	コード	記述数
生活状況	豊かな生活	住民同士の親密な交流	2	生活状況	豊かな生活	地域・住民同士の親密な交流	13
		楽しみや生きがいのある生活	10			楽しみや生きがいのある生活	16
		ゆとりのある生活	5			生き生きとした生活	16
		慣れ親しんだその土地が好きで心地よい	11			ゆとりのある生活	27
		そこに住むものにしかわからない良さ	2			慣れ親しんだその土地が好きで心地よい	16
		生活環境が健康に役立つ	7			生活環境が健康に役立つ	6
		豊富な自然環境	2			豊富な自然環境	4
	不便な生活	買い物や交通に不便な生活	7		あたりまえの生活	不便に感じていない生活	13
		不便な生活	2			あたり前の生活	13
		農業で生計を立てることの難しさ	2			これが普通の生活	4
	工夫した生活	不便な中で工夫した生活	6		不便な生活	買い物や交通に不便な生活	3
		今あるものを最大限に使った生活	3			不便な生活	5
	健康障害を抱えながらの生活	身体に不都合を抱えながらの生活	7		工夫した生活	知恵のある生活	9
		症状がなければ病気を気にかけない	2			不便なりに工夫した生活	4
		生活環境からくる身体的不都合さ	5			今あるものを生かした生活	7
	生活を維持	薬の管理の難しさ	2		生活を維持	自然の中で生活	13
		不便さに馴染み気にならない生活	8			自ら行う健康管理	12
		自然の中に馴染んだ生活	5			自給自足の生活	15
		自ら行う健康管理	6			できる範囲内の生活	4
		自給自足の昔ながらの生活	11			身体的に厳しい生活	7
		収入源は農業	2			経済的困難さを抱えた生活	5
		精一杯働く生活	5		心細く寂しい生活	高齢者のみの寂しい生活	3
	離れて暮らす寂しさ	家族と離れ離れの寂しい生活	2			近所同士が遠い	3
社会	住民同士の強い絆	住民同士親密で助け合い・支えあう	10	社会	住民同士の強い絆	地域の人たちと助け合い、支えあう生活	17
		住民同士の強い仲間関係	2			繋がりが強く、結束力が強い	10
	慣習	そこでの生活や慣習を守る	3		役割がある	自分の居場所や役割がある	4
価値観	自分らしくかけがえのない生活	自分らしい生活	3	価値観	社会的支援	公的サービスに支えられた生活	2
		かけがえのない生活	4		充実感のある自律した生活	誇りと自信を持った、自律的生活	7
		自ら決定していく生活	2			満足した生活	2
		生活スタイルを変えない	2		気遣いと感謝	感謝の気持ちを持って生活	2
						気遣い合う生活	3
					家族が支え	家族が支え	2

ではないかと思う」と記述されていた。

また、多くの学生はへき地に暮らす人々の生活を不便そうではあるが、多少の不便は当たり前のことであってむしろ、へき地に暮らす人々にとっては自然のことであり、『あたりまえの生活』であると捉えていた。「へき地に暮らすことは大変そうだが、へき地に暮らす人にとっては当たり前であり、住みやすい環境であるとわかった」や「不便だと思うがそこで暮らす人にとってはそれが当たり前で、不便だとは思っていないと思う」と記述されていた。

### カテゴリー 3 《不便な生活》

この地は辺鄙な土地であるため買い物や交通に不便な生活である。

たとえば「買い物に行く日は限られる不便さがある」、「隣近所が遠かったり、少し不便なものもある」、「交通などの移動手段がない」と記述されていた。学生は生活する上での利便性に焦点をあて、記述していた。

### カテゴリー 4 《工夫した生活》

不便に見える生活であるが、そこに住む人々は自然をうまく使い今あるものを最大限に活用し、少しでも快適に過ごせるよう智恵のある生活をしている。

『今あるものを生かした生活』では、へき地に暮らす人々が自然やそこにあるものをうまく使いその地域の特徴を生かして生活していたと捉えていた。例えば、「野菜などは土の中に保存していると聞いて、自然の作用を上手く使って生活されているんだと感じた」や「そこにあるものを上手にを使って生活している。自分たちの住みやすい環境になっている」と記述されていた。

さらに生活の仕方については、『知恵のある生活』であると捉えており、例えば、「雪かきは少ないうちに行くなど生活の知恵を使って自分たちで経験から考え工夫して生活している」や「今ある現状を受け入れてその中でも自分た

ちなりの生活をしていると思った。できない事、ない物を見るのではなく、今あるものを見て」など、自然の道理を知り、これまでの経験からその地や自分の身体にあった方法を選び、少しでも快適に暮らせるように智恵を働かせて生活をしている様子が記述されていた。

### カテゴリー 5 《生活を維持》

身体的・経済的な厳しさを抱えながらできる範囲の中ではあるが、自然の中で自ら生活し、そのような生活を自然に行っている。

『自給自足の生活』では、学生は人々がへき地での生活を維持するために立地的な不便さを抱えているため、作物を作り、野のものを採取し・狩猟するなど、その生活はほとんどが自給自足の生活であると捉えていた。例えば「自分たちで作物を作ったり、きのこや山菜を山で採ったりして…、肉は狩猟をして食べている」や「年金生活をしているのなら、月3万円程度で過ごさなければならぬと考えたと自給自足の生活をしていかなければいけないのかと考えた」と記述されていた。また、他の理由としては年金生活であり節約せざるを得ないため、自給自足の生活をしていると捉えている学生もいた。

『できる範囲内の生活』では人々が力みすぎず、出来ることをし、身の丈にあった生活を営んでいると捉えていた。しかし、「自分たちのできるところはやって、その場で生活している」や「生まれ育った所なので、自分たちのできることをして生活している」など抽象的な表現であり具体的な記述は少なかった。

『身体的に厳しい生活』では、「農業で、自然が相手の肉体労働なので、高齢者は体力的に無理をしていそう。大変そう」と生活していくことに多くの労力が必要と感じていた。また、『経済的困難さを抱えた生活』では「肉や魚は週1で売りに来る人がいるが、最近を買っていないと言っていた…」と記述されており、学生はへき地に暮らす人々の生活が単純では

ないと考えていることが窺えた。

『自ら行う健康管理』ではへき地に暮らしているがために、人々は健康への意識が高く、自らの体調管理をしていると捉えていた。例えば「へき地であるために、救急車が到着するまでに時間がかかることをわかっているので、自分で健康管理している」と記述されていた。

また、『自然の中で生活』においては、へき地に暮らす人々が自然に合わせて共存していると捉えており、人々がどのように自然と共生しているか具体的な記述が多く見られた。例えば「自然と共生している（きのこ狩りや竹の子掘りを行ったり、イノシシや猿などに畑をあらされてしまったりする）」や、「畑を耕し、朝日が出る前から起き、夕方早くに寝てしまう」などであった。

#### カテゴリー 6《心細く寂しい生活》

近所同士が遠く、また若者が出て行き高齢者のみの寂しい生活である。

学生は、「近所や隣の家というものがとても遠い」や、「高齢者が多いことによる不安、さみしさがあるのでは、若者が出て行ってしまう辛さ」と記述しているように、『近所同士が遠く（い）』、『高齢者のみの寂しい生活』を送っていると捉えていた。

#### 2) 社会に関すること

このグループではへき地に住む人々の精神的なつながりや役割、社会的支援について記述されていた。

#### カテゴリー 7《住民同士の強い絆》

地域住民の結束力や繋がり強く、人々は助け合い支えあう生活をしている。

『地域の人たちと助け合い、支えあう生活』では、学生はへき地で暮らす人々はその地に住む方々と親密であり助け合い支えあって生活していると感じとっていた。例えば、「…近所の人同士助け合って数日間顔を見なかったら

見に行くと行ったように付き合いを大事にして生活している。助け合いながら毎日を送っている」や「農産物を分け合ったりしょうゆを貸し借りしたり、隣の家が遠いけど、気軽にそういうことが出来る関係がそこにはある」と記述されていた。

また、『繋がり強く、結束力が強い』では、「お隣さんのことも身内のように付き合い合っていて」「ご近所や地区、みんなが仲が良い、…絆が強い、近所の繋がりも強い」など住民同士が長年の付き合いを基盤に、気兼ねのない親しい関係が築けていると捉えていた。

#### カテゴリー 8《役割がある》

暮らしている家や土地の中に、居られる場所や役割がある。

『自分の居場所や役割がある』では「集落の中での自分の居場所や役割がある」や「自分たちの役割（農業やこんにやく作り）があり、そこでの暮らしに満足している」と記述されていた。しかし、記述の多くが抽象的な表現にとどまり、詳しい記述はなかった。

#### カテゴリー 9《社会的支援》

公的サービスに支えられた生活である。

「自力での歩行が困難な方はヘルパーさんが車で送迎してくれるサービスを使っていて、サービスを使うことで、へき地での生活にも適応できているんだなと思いました」と記述しているように、援助を必要としている高齢者がへき地で生活していくためには、公的サービスが不可欠であると考えていた。ここでいう公的サービスとは単に提供者が自治体であるとか民間であるという事ではなく、外部からの支援を広く指している。

#### 3) 価値観に関すること

このグループではへき地に暮らす人々の価値観や自律性について記述されていた。

#### カテゴリー10《充実感のある自律した生活》

暮らしている土地と自らの人生に誇りを持ち、生活に伴う苦勞を乗り越えてきたことが現在の自信と満足した生活に繋がっている。

『誇りと自信を持った自律した生活』では、「自分たちの住んでいる地区をととても大切にされていて、誇りを持っておられると感じた」、「へき地での生活習慣など、葛藤を感じながらも受け入れその中で、自分の生活を確立してきたのだと思った…。そのため、精神的に強いのではと感じた」、「過去の生活での苦勞が糧となり、試行錯誤してきて乗り越えてきたことが現在の自信へと繋がっている」などの記述があった。学生が実際に赴いて不便なところだと感じたそのような土地で、長年暮らし苦勞を乗り越えてきた経験が、へき地の人々の現在の自信や誇りに繋がっていると感じていた。

『満足した生活』では「すぐに買い物にいけない。隣の家へ行くにしても20分前後かかる、移動手段としては徒歩など私達にしてみれば不便と感ずることばかりだが、今の生活を満足している。不便と思っていない」と記述されていた。学生の価値観では不便と感ずるようなことでも、へき地に暮らす人々は不都合を感じず満足して生活をしていると捉えていた。

#### カテゴリー11《気遣いと感謝》

日々の生活をありがたく感じ、また、地域の人と気遣い合って暮らしている。

『感謝の気持ちを持って生活』では「感謝の気持ちを忘れずに、生活されていると思った」のように、日常の生活においてありがたいという感謝の気持ちを忘れずに生活していると捉えていた。しかし、抽象的で詳しい内容は記述されていなかった。

『気遣い合う生活』では、「洗濯物や窓が閉まっていれば声を掛ける、診察に来ていない人のことを心配するなど、とても気を使っていた」など、へき地に暮らす人々は自分以外の周りの人に対して、互いに気遣い合い、配慮し合

いながら生活していると捉えていた。

#### カテゴリー12《家族が支え》

どこに住んでいようとも家族を支えにしている。

『家族が支え』では「一緒に住んでいる家族や、離れて暮らす家族を支えにしている」のように、一緒に住んでいる家族はもちろんのこと、遠く離れて暮らす家族であっても常に家族を支えにしていると捉えていた。具体的な記述は少なかったが、どこに住んでいようとも家族同士の絆が強いと感じたことが窺えた。

### 2. 平成16年度と平成17年度の学生による記述の比較

#### 1) 記述数等に関する比較

本研究のテーマに関連した総記述数は平成16年度154であったが平成17年度は267と著しく増加した。また、カテゴリーにおいて平成16年度は9カテゴリーに分けられたが、平成17年度は12カテゴリーに増加した。

#### 2) 生活状況に関する比較

《豊かな生活》の記述数は平成16年度が39であったのに対し平成17年度は98と著しく増加していた。コードに関しては、『住民同士の親密な交流』や『楽しみや生きがいのある生活』『ゆとりのある生活』など類似した内容のものが多くあった。しかし、平成16年度は学生たちには良さが分からないが、そこに住む人々にとっての良さがあるものであろうという、『そこに住むものにしか分からない良さ』というコードが抽出されたが、平成17年度は消極的や否定的な表現よりも、『生き生きとした生活』という記述が増え、学生たちはへき地に実際に赴き人々の生活を肌で直接感じ取り、その暮らしの様子に感心し、好ましく捉えていることが窺えた。

また、平成17年度新たに抽出されたカテゴリー《あたりまえの生活》の記述数は30と多

く見られた。つまり、学生はへき地に住む人々は、へき地での生活を不便に感じず、むしろそれはあたり前で、普通の生活であると捉えていることが窺えた。

《生活の維持》について、平成16年度は不便ではあるけれどもなんとかそこに馴染んで生活しているのだという消極的な捉えが見られたが、平成17年度は出来る範囲の中ではあるが自然の中で自ら生活を行っているという積極的な捉えが多く見られた。また、一方で平成16年度は生活を維持するために出来ることを最大限に精一杯毎日働く生活であると、深みのある捉えをした学生も見受けられたが、平成17年度は身体的に厳しいことや、経済的困難さといった直接的で表面的な捉えをした記述が多かったのが特徴的であった。

平成16年度は《健康障害を抱えながらの生活》といったカテゴリーがあり、その記述数は16であった。学生が実習で接する人々は、へき地に暮らしなおかつ、巡回診療を利用している患者であるが、平成17年度は《健康障害を抱えながらの生活》に関連した記述は見受けられなかった。

### 3) 社会に関する比較

平成16年度は記述数15であったが、平成17年度は記述数33と増加していた。平成16年度同様、へき地に住む人々の連帯感やその繋がり**の強さ**といった《住民同士の強い絆》に焦点を当てているものが多かった。また新たなカテゴリーとして《社会支援》や《役割》が抽出されていた。しかし慣習などの文化的背景に焦点を当てたカテゴリーは見受けられなかった。

### 4) 価値観に関する比較

平成16年度は記述数11でカテゴリーは《自分らしくかけがえのない生活》の一つのみであり、『自分らしい生活』『かけがえのない生活』などのコードが抽出され、その人らしさ

に焦点が当てられていたが、具体的に記述されているものは無かった。平成17年度は記述数16で《充実感のある自律した生活》《気づかいと感謝》《家族が支え》とカテゴリー数も増え、へき地に暮らす人々の満足感、自律性、感謝する気持ち、さらに拠りどころとしての家族など人の内面に焦点を当てた具体的記述が多かった。

### 5) 平成16年度と比較した平成17年度の学生の捉えについてのまとめ

- (1) へき地に暮らす人々の生活の在り様や、価値観というものについての記述数や具体性が増していた。
- (2) へき地に暮らす人々の生活の在り様や価値観に関して、前向きに生活していると捉えていた。
- (3) 健康障害を抱えながらの生活であるという観点での、捉えが乏しかった。

## 考 察

平成17年度の学生の捉えの特徴として、へき地に暮らす人々の生活の在り様や、価値観についての記述数が昨年度の154から267と増大していた点が挙げられる。なかでも生活状況を肯定的に捉えるカテゴリーについて見ると、平成16年度の《豊かな生活》、《工夫した生活》の記述数が合わせて48であったのに対し、平成17年度は《豊かな生活》、《工夫した生活》に《当たりまえの生活》が加わりこの三つのカテゴリーの合計記述数は、148と著しく増加していた。

記述数の増加は、へき地に暮らす生活や価値観に関する学生の視点が多岐に亘り、広がっていたことを示唆している。その要因として、限られた実習時間で目標に到達できるよう、平成16年度の結果を踏まえ、対象を点ではなく継続的に捉えるということに加えて、一人の生活者として生活の営みやその意味が捉えられるように、様々な生活のあり様の理解を



深めるための教員の意識的な関わりが寄与したと考えられる。また、他の要因としては前述したような教員の関わりに加え、平成16年度から活用している患者個別記録が2年目を迎え、個々人の情報に厚みが増したことが挙げられる。

しかし、へき地に暮らす人々の生活・価値観についての平成17年度の学生の捉えは、具体性が増し、幅が広がった一方で、深まりは昨年同様、表面的にとどまることが多かった。教員は、へき地に暮らす人々の生活の営みの意味が深まるように実習前・中・後を通して関わっているが、学生の生活体験の乏しさに加え、へき地での実習が短時間で一回限りであるという制約もあり、生活の一つ一つの営みについての深い意味を捉えることは困難であるといえる。学生の捉えが表面的であったさらなる要因として、実習とグループワークの時期が離れている学生も多く、実習直後には捉えられていた事が時間の経過と共に記憶が薄れていったことや、グループワークに活用した資料が患者個別記録のみであったため、出来事の詳細を想起することが困難であったことが考えられる。

実習に関わった教員の感触としては、実習直後に書かれた学生のレポートでは、へき地に暮らす人々の個々の生活の在り様について具体的に深く言及している学生も多かったように感じている。へき地巡回診療実習は時間的に制約のある実習ではあるが、対象理解を深めるためには今後、実習終了後のグループワークにおいて学生が体験したことを想起しやすいように<sup>9)</sup>、患者個別記録のみではなく、実習直後に記載したレポートも活用することが有効であると考え<sup>10)</sup>。

学生がへき地に住む人々は前向きに生活していると捉えた要因としては、記述にあるように実際にへき地に赴き人々の暮らしを垣間見て、素直に感心したり良い事だと感じたりすることが多かったことが挙げられる。短い実

習の中でも、へき地の人々の生活における様々な工夫を聞いたり、自然と共存し智恵のある生活を実践している姿を見たり、自らの生活と比べる中で、へき地に暮らす人々の生活への前向きさや、積極的な姿勢に、より焦点が当てられていったのではないかと考える<sup>11)</sup>。

しかし、へき地に暮らす人々がどのような困難を経て、現在の生活へ至ったのかそのプロセスについての視点は見受けられなかった。対象の理解においては、現在のあり様を知る事はもちろんであるが、現在に至るまでのプロセスを知る事も、対象の理解を深めるために不可欠である。へき地巡回診療実習においても、対象の理解を深めるためには当然、生活のプロセスに焦点を当てる必要があるが、巡回診療に参加できる機会は一度きり、3時間程度であるため、学生は、現在の生活を知り理解をすることで精一杯なのが現状である。生活のプロセスに焦点を当てる意味においても、実習終了後の振り返りの時間を設けることの意義は大きい。また、現在抱えている生活の困難さに焦点を当てていた学生は若干名であり、身体的や経済的厳しさなど際立って目に付くものを取り上げられていた。捉えが直接的で表面的であるという点は否めないが、例えば「年金生活をしているのなら、月3万円程度で過ごさなければならぬ」と考えると、自給自足の生活をしていかなければいけないのかと考えた」と学生は一つ一つの困難さが独立してあるのではなく、互いに絡まりあって複雑な在り様を呈しているということを理解していた。物事の良さのみに着目すると、良かったという理解のレベルに留まり、様々な出来事が複雑に関わっているとか、入り混じっていて簡単には捉えられないプロセスがある事に気づくことが出来ない。したがって教員は、良い点ばかりではなく、生活の困難さにも焦点をあて一人の人を全体的に捉えられるように関わっていく必要がある。

平成16年度は《健康障害を抱えながらの生

活》といったカテゴリーが抽出されたが、平成17年度は、《健康障害を抱えながらの生活》に関連した記述は見受けられなかった。その要因としては、学生の視点が生活者や生活の営みに焦点化されており、教員の発問もそれらに関連することが多かったためではないかと考えられる。対象者が健康障害を抱えながら生活している人であるという観点が抜け落ちないよう、対象者の背景も視野に入れて捉えられるような教員の関わりが必要である。

## ま と め

平成17年度のへき地巡回診療実習においては、へき地に暮らす人々を一人の生活者として、その生活の営みや意味が捉えられるよう教員が意図的に関わったり、同一患者を受け持った学生同士による実習後のグループワークを行った。その結果、へき地に暮らす人々の生活や価値観に関する記述数の増加や、捉え方の広がり、具体性の増加などが見受けられ、対象理解において効果があった。

## 注

- 1) ・へき地とは、へき地保健医療計画においては、交通条件及び自然的、経済的、社会的条件に恵まれない山間地、離島その他の地域のうち、医療の確保が困難である地域をいう。無医地区、無医地区に準じる地区、へき地診療所が開設されている地区などが含まれる。
- ・へき地中核病院とは、無医地区等を対象とする巡回診療、へき地診療所への医師派遣などへき地における医療活動を継続的に実施できると認められる病院で知事が指定したもの。主要な診療科を有し、かつ、原則として200床以上の一般病棟を有する病院であり、へき地医療活動を50日以上行うことが可能な医師、看護師を配置していること。
- ・へき地診療所とは、へき地医療を確保

するため、人口1,000人以上で、最寄の交通機関まで通常の交通機関を利用して30分以上要する無医地区に設置された診療所のことをいう。平成6年度末現在、全国に886ヶ所設置されている。平成3年度以降は都道府県にへき地勤務医師等確保協議会が設置され、協力病院からへき地に定期的に医師を派遣する事業が新たに導入される等、へき地診療所の医師確保のための施策が強化されている。(出典：厚生労働省：第9次へき地保健医療計画の策定について。医政発384号)

## 文 献

- 1) 平山恵美子，登内芳子：看護学生が捉えた「へき地」に暮らす人々の生活・価値観。飯田女子短期大学紀要第22集，pp.113-122，2005。
- 2) 武井麻子，春美静子，深澤里子：ケースワーク・グループワーク，光生館，1994，pp.165-177。
- 3) 武井麻子：「グループ」という方法。医学書院，2004，pp.13-33。
- 4) 鎌倉雅彦他：心理学マニュアル質問紙法，北大路書房，京都，2002，pp.35-37。
- 5) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践，弘文堂，東京，2003，pp.144-208。
- 6) Anselm Strauss, juliet Colbin (南裕子訳)：Basics of Qualitative Research, 質的研究の基礎グラウンデッドセオリーの技法と手順，医学書院，東京，2000，pp.59-74。
- 7) 山本則子他：グラウンデッドセオリー法を用いた看護研究のプロセス，文光堂，2002，pp. 60-78。
- 8) Catherine Pope et al. (大滝純司訳)：Qualitative Research in Health Care, 質的研究実践ガイド，医学書院，2003，

- pp.10-16.
- 9) 中木高夫, 石黒彩子, 水溪雅子: クリティ  
カルシンキング 看護における思考能力  
の開発, 南江堂, 1997, pp.6-8.
- 10) 藤岡完治, 安酸史子, 村島さい子, 他:  
学生ともに創る臨床実習指導ワークブッ  
ク, 医学書院, 2001, p.108.
- 11) 薄井担子: 看護学原論講義, 現代社, 東  
京, 2003, pp.51-52.